
桜色の手紙

佳奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜色の手紙

【Nコード】

N6522B

【作者名】

佳奈

【あらすじ】

一年前から一度も会っていない初恋の人を今も思う私。私は二人が別れた日から今まで毎日彼に「出せない手紙」を書いている・・・。

「今でも、私の想いは何も変わってはいません。翔くんと初めて出会った三年前のあの日から」

私はそうつぶやいた。私の重い重い言葉は春の日差しの中をすくと落ちていった気がした。この言葉は、この思いは、私以外の誰の耳にも届かない。暖かな風の吹く、桜の並ぶ土手にかかる小さな橋。私はそこにただ一人、橋の上から川を見下ろしていた。握りしめた手の中には昨日の夜何時間もかけて書いた想いがつづられている便せんがある。私はそこに書かれてあった言葉をただよんだだけだった。

翔くんは私の初恋の人で、去年の冬から一度も会っていない。そして、会わなくなつた冬のあの日から私はおかしなことに毎日翔くんに手紙を書いている。出せない手紙を。そしてそれらはもうすぐ三百通になるうとしている。部屋の引き出しの中で眠っている私の想いが報われることはないだろう。彼は私の心の重たさを拒絶して去っていったのだから……。

それでも、私は毎夜手紙を書いてこんな風に次の日、太陽の下で私はその手紙を開く。今日も一日好きでいようと、いられるとそんな勇気をもらうように思うからだ。

翔くんの笑う理由、涙を流す理由、にらみつける理由……感情が愛おしかった。

私の名前を初めて呼んでくれた時の感覚を、胸が高鳴つたあの時の気持ちを……私は忘れることが出来ない。三ヶ月後、一年後、三年後もしたら何か起きて翔くんが戻ってきてくれるかもしれない。言い出したらきりのない切ない願い。二人がおばあちゃんとおじちゃんになつてからのそんなもしかしたらの奇跡さえ信じる事が出来た。ふいに涙がこぼれてきた。習慣になつていた彼を思い出す時間。それでも私の胸の痛みが消えることはない。流れてくる私の思

いを止めることが出来なかった。涙をぬぐおうと顔を上げたとき、輪郭のぼやけた世界の中できらきらと輝くピンク色の花びらを見た。幸福を初めて目で見たと思った。翔くんと出会った時に感じたあの幸せに似ている気がした。

あなたは私に何が伝えたいんですか？私はポーとした思考回路の中でそう桜に問いかけた。あきらめると、前を向けと。それとも、翔くんを待っているかと・・・会いに行けと？

答えは返ってくるはずはなかった。ただ私は私の心の中の声を聞いた気がした。幸せになりたいと・・・さっき感じた桜の花びらのように、あなたとの幸福だけでない、別の幸福だってあるはずだからと、そう私の心は私に言った気がした。涙はとうに冷たくなっていた。でも私はそつと穏やかな気持ちで握りしめていたピンク色の便せんを破いた。桜の花びらのようにきらきらとこの川に散ることを願いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6522b/>

桜色の手紙

2011年10月3日20時44分発行